
とある呪術の都市破壊

桃花仙 雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある呪術の都市破壊

【Nコード】

N6913N

【作者名】

桃花仙 雅

【あらすじ】

滅ぼしてやろう・・・この学園都市を
裏切ったアイツごと
そう誓った魔術師は禁忌とされる『呪術』を使い学園都市に恐怖
を振り撒くのであった・・・

あいさつ

この作品が私の初作品となります？

設定もマニアックで駄文になりそうですが、楽しんで読んでもらえば幸いです？

ちなみに私は黒子好きですが、何だかこの作品は黒子いじめになりそうです？

また、この作品には二次創作が含まれます

それに進行速度がバラつくことがあると思いますが、私まだ学生なので勘弁して下さい？

それに経験不足なので誤字脱字が多々あると思いますので教えてください？
まだまだ初心者で至らぬところがあると思いますが宜しく
お願いします？

プロローグ 裏切られた者の思い（前書き）

さあ？

やっと本編です！

といってもプロローグですけど

プロローグ 裏切られた者の思い

ねえ…アレイスター

覚えてる？私・・・あなたに魔術を覚えてもらったんだよ？

おかげで私 町一つ消せるぐらいの魔術使えるようになったの！

でもあなたは魔術よりも科学を選んだのね・・・

分かってる

大丈夫よ これからあなたの作り上げたもの全部ぶっ壊して目を覚
まさせてあげる……………

科学なんてイラナイ。この世界には魔術だけで十分……………
でも学園都市をぶっ壊すためには少し準備が必要な

待っててね？アレイスター！

byサリス・トラシューナ

プロローグ 裏切られた者の思い（後書き）

駄文ですいません？

後編集のしかた間違えた？

つかの間の平和（前書き）

やっと本編です？

最初はキャラ紹介をしつつ進めます

つかの間の平和

フィアンマを倒してから丁度、半年が過ぎたころ
戦い終わった後のゴタゴタも無くなり戦地に赴いた戦士たちも、久
々に平和を味わっていた……

上条家

「インデックス！今日の朝飯はごちそうだぞ！
なんと ご飯に味噌汁とほうれん草の煮浸し サンマさまだッ
不幸貧乏でフラグ体質の……そう、上条当麻だ
久々のマトモな食事に心底嬉しそうだ。」

「わあい！サンマだサンマ 春夏秋冬いつに食べても美味しいぞ
ーっ」

この小柄なシスター服に身を包んだ少女はインデックス（禁書目録）
だ
何だかんだあって当麻と一緒に暮らしている。

つかの間の平和2 (前書き)

次は中学生達の場合です？

つかの間の平和2

常盤台中学生達

「ねえ 黒子？ 私の飲み物に何か入れたでしょ！何なのよこの粒はっ！」

人目を気にせず怒鳴っているのは 常盤台が誇る最強の電撃姫 レベル5

御坂美琴

怒りっぱいのだ

「ご安心下さいませ お姉様 これは単に炭酸が出るタブレットですわ ことあるごとに私を疑うこと……止めて下さいませんか？」

このツインテールの少女は ジャッジメントという治安維持をする

組織

に入っている テレポーター 空間移動

レベル4 白井黒子

先輩の美琴お姉様が大好きなのだ 時々度が過ぎるが……

「それ………自業自得じゃないの」

つかの間の平和3 (前書き)

アクセラレータの会話文に自信がないです？

つかの間の平和3

通行止め

「ヒマなので ホットケーキを作ろうとミサカはミサカは提案してみたり！」

白い髪の少年の横で 飛び跳ねているのは、美琴の体細胞から作られた20001番目のクローン 通称打ち止め 小さいながらミサカ ネットワークを束ねる、指揮者だったりする

「ああン？・・・そうだなア 腹も空いてきたし
しゃアねエ 作るかア」

ソファアからかつたるそうに立ち上がるのは、

通称 アクセラレータ 一方通行 自分が今までやってきたことを悔やみ、正義になることを誓った。 今のはのんびりと時を過ごしている

「わーい ホットケーキだーってミサカはミサカは喜んでみたり！」

つかの間の平和 4 (前書き)

つかの間シリーズは今回で終わりです？

つかの間の平和4

柵川中学生達

「あれえ？　ここで待ち合わせだって　言ったのにまだ来てないの
かなあ・・・？」

頭に色とりどりの花の付いた　カチューシャを着けている、ちよつ
と頼りなさそうな女の子は

初春飾利　見た目に反してパソコンの操作技術は素晴らしく、その
能力を生かして　黒子と一緒にジャツジメントの仕事をしている。

「う~~~~い~~~~はあ~~~~る~~~~！　お待たせーっ！　・・・・・・今
日はピンクの花柄があ〜」

いきなり出会い頭に初春のスカートをめくったのは　佐天涙子　初
春の同級生で、中学一年生明るくお茶目でいつも初春を引っ張って
くれる　実は彼女は無能力者で、それが少しコンプレックス
過去にそれが原因で意識が無くなったことがあり、今でも能力者に
憧れている。ちなみに都市伝説に興味がある

「えっ・・・・・・きゃああああっ！　佐天さん普通に声かけ
てくださいよお・・・・・・」

「あははっ！　ごめんごめん　　つい癖で」

端から見ると驚くが、これがいつものやり取りである

つかの間の平和4 (後書き)

つかの間シリーズながいよ？

裏切った者の思い（前書き）

な・・・・・・・・長かった（自分の内では）

裏切った者の思い

アレイスター・クロウリーは、液体の入ったビーカーの中で、学園都市に侵入した一人と一匹いち早く気づいていた。魔術も科学も極めた天才なのだから、不思議なことではなかった。そこが密室であつたとしても……

「おや？ この懐かしい気配は……ああ 誰かと思えばサリスではないですか……私の弟子であり、そして 天敵……姿を眩ませて隠れたつもりでした……が そうはいかなかったようです」
誰に言つたつもりでもないのに返事が 返ってくる

「おいおい……また俺達……いやフィアンマを倒した時みに集まらないといけないのか？ 勘弁してくれ……」

気だるそうにタバコをくわえているのは、ステイル「マグヌス 長身の魔術師 一瞬だけ、少女の姿が見えた

「ああ ステイルかい 君も気づいたんだね……侵入者に」

いきなり声をかけられてもアレイスターは、驚かない

「そりゃあ気づくだろう？ 何せ現代では一人しか居ない呪術師だからな……なんで今になって出てくるんだ？」

ステイルは頭を掻いた

「まあ 今では絶対に使つてはいけない魔術だからね．．．．．恐らく『アレ』か『アレ』を使われたら

このビルも崩壊し、学園都市ごと 僕もお陀仏ということになるね」

アレイスターは恐ろしいことをサラツと言いつた。まるで自分の脅威ではないかの様に．．．

「おいおい 随分余裕だなあ 俺なんてこれからイギリス正教に連絡を しないとイケないんだぞ？」

そう言つて立ち去ろうとするステイルに向かつて声が響いた

「その必要はないよ ステイル 君一人とあの子達で十分だ。」

その発言にステイルは、目を見開く

「アンタなに言つてるのか．．．．．分かつてるのか？ 援軍を呼ばないと勝利は望めな」

アレイスターは珍しく人の話に割り込んできた

「呪術師が 援軍が来るまで『アノ』術を発動させないと思つているのかい？ それに．．．．．」

アレイスターは笑う

「サリスはよほど科学が 嫌いみたいだね．．．．．一度もこの学園都市を偵察していないのだよ？ その時点でサリスの負けさ．．．．．幻想殺しの存在を 知らないからね」

アレキスターは、もう話す事は無いと言わんばかりに、自分の研究に戻ってしまった

「……………そうかい」

・ そう言うとステイルは少女と一緒に、外に出て行った……………

裏切った者の思い（後書き）

次回から主要メンバーの話になります？

何気ない会話（前書き）

このエピソードは呪術師の複線・・・かな？

何気ない会話

上条家

久しぶりの、豪華な夕食を味わった当麻とインデックスは、テレビを見てくつろいでいた。

「これは、呪いじゃないよ呪術だよ！」

インデックスはテレビ画面に向かって話している………いつもの事だ

「おい インデックスそれは、テレビだぞ！ いくら言っても聞かえないって！」

当麻は当たり前前の事を言う

「うう………分かってるんだけど、この術式を解くためには、術者を倒すしかないんだよ！ 呪術は危険なんだもん！」

インデックスは足をバタバタしている

「だから魔術師 魔術師って………ん？ 呪術？ ……インデックス、お前って魔術の他にも記憶してるのか？」
当麻は驚いた。

「ううん、簡単に言うと、呪術は魔術の一種ってことなんだよ。術式も、扱い方も似ているけど、呪術はかなり昔からあって、それでいてすごい強力なんだ。」

インデックスは得意げに腰に手を当てて言う

「へえ〜 じゃあその呪術ってのは、使ってる人が多いのか？」

当麻は興味本位で聞く

「実は、呪術っていうのは強力にんだけど、発動するまでに時間とか手間がかかるんだ。それに……」

インデックスは急に真剣な顔になった。どうやら何か重要な事を言うみたいだ。

「呪術の使用や、覚えることは現代では禁止されているんだ。禁忌魔術なの。だから、呪術がどんなもので、どんな種類があるのかっていうのは知ってるけど、術式とか発動方法、術名は知らないんだ。実際に見たことも無いし」

インデックスは眉間に指を当てながら言う。記憶を思い出しているようだ

「おいおい、そんな魔術があるのか……その呪術ってのは、よほど強力なんだな。どんなものがあるんだ？ 知ってる限りでいいから教えてくれ」

当麻は、なんだか珍しい話を聞いたので、興味が湧いてきた。

「んーっとね、『魔術・禁忌なる呪術 第41章 12説』に載っている、『人狼の呪術』っていうのがあるよ。人を狼に変える

あー！今テレビに映しているやつみたいに……」

とインデックスがテレビを指差すと、そこには外国の映画「モンス
ターキラー」というものが放送されていて、場面はちょうど人間が
満月の下で、狼人間になるところだった。

「へえー、そんなSFチックな魔術があるんだな」

当麻は冗談半分で聞いていた。

「名前にこんな感じになって、思っただけなんだけどね、えつと
他にも『吸血鬼の呪術』『屍の呪術』『曇天の呪術』『影の呪術』
……ぐらいかな、後は分からないなあ、読んでないから」

もう知っていることは無いようだ。インデックスといっても、さす
がに記憶していないことは分からない。

「どんな魔術なのか曖昧に記憶してるって、なんだかもしかしいん
じゃないか？」

たしかに曖昧なものほど気になるものはない。

「そうだね、機会があるなら実際に見てみたいかもね」

インデックスは頷きながら言う

「だからって禁忌とされるぐらい……だもんなあ死人が出そうだ
な。」

当麻は考え込んだ

「冗談だよ　さて！　続きを見ようかな」

インデックスは視線をテレビに向ける。

「そうだな。」

2人の興味はテレビに映った。

これから「呪術」の恐ろしさを知るのは、
もう少し後から……………

何気ない会話（後書き）

次回は呪術師さんが登場します（多分）

街に現れた呪術師（前書き）

「私オリジナルの魔術が出てきます？」

街に現れた呪術師

上条家と同時刻 常盤台女子寮付近 ビル屋上

そこには、黒い布に金色の刺繍がされているドレスを着た、オレンジ色の髪を、腰まで伸ばした女性と「怪物」が立っていた。なぜ「怪物」と表すかと言うと、まさにそれと表現するしか無かったのである。

黒く、短い二本の角に、爬虫類の様な顔と頭、黄色い瞳、赤黒い皮膚、女性の胸ぐらにはある腕、二メートルは優に越す身長、蛇の様な尾……………

「科学の街と言っても……………対したことないわね、兵器みたいなものが、ゴロゴロしてるかと思ったら……………子供ばかりじゃない。そう思わない？ティアマト。」

サリスは呆れた顔をしながら、「怪物」に向かって、喋りかける。どうやら「怪物」の名前はティアマトと言っらしい。使い魔か何かのようだ。

「確かに私達が、想像していたものよりは、いくらか違った、な」ティアマトは見かけによらず、言葉が話せるようだ。しかも、片言でもないようで、しっかりと話せている。まるで人間の様に

「まあ、でもあなたが居なかったら、あの変な機械に捕まってたかもね。ありがとう……………ティアマト。」

サリスは一メートル近い身長差の、ティアマトの頬を撫でた。

「私は、私のやるべき事をしたまでだよ。サリス」

自分の頬に添えられている、サリスの手を、愛おしそうに、自分の大きな手で触った。その光景は、まるで仲の良い夫婦の様だった。

「ふふっ……ありがとう。　あら？あそこに歩いているのは？」

サリスは遠目で、ビルの下の道を見る。そこには2人の女子生徒が歩いていていた。

一人は、茶髪の肩までぐらいの長さの、花のヘアピンを着けている子と、もう一人は、赤茶色の髪を、リボンでツインテールにした子だった。

「……ちょうどいいわ、ティアマト！　このビルの裏路地にいる、犬を一匹、ここに用意しなさい。」

サリスの目つきが、変わった。それは背筋が凍りつくような目……だった。

「ああ、分かった。」

ティアマトは、地上九メートルはあるビルの屋上から、飛び降りると、音もなく着地して、裏路地に消えて行った。

「悪いけど、魔力を温存するために呪術を使って無かったから、実験台になってもらうわよ……これから、もっと強い呪術を、使う事になるんだから……。」

と、サリスは言いながら、足元に何か書いている。

「コイツで良かったか？」

少し経ってから、ティアマトは腕に犬を乗せて戻ってきた。そこにいたのは、焦げ茶色の大人しく、可愛い犬だった。

「ええ、いいわ、この犬なら飛びつかせなくても、あっちから飛びついてくれそうね。」

サリスはティアマトから犬を受け取ると、赤い塗料で書かれた、魔法陣のようなものの上に、犬を乗せた。

魔法陣が禍々しく光る

「目覚めよ、野生、吠えよ、狼獣
『狼獣の覚醒』(ビースト
アウエーク)!!!」

サリスが呪術を唱えた。一瞬、光が強まったかと思うと、すぐに消えてしまった。

「……………ふう……やっぱり呪術は魔力が消費されるわね。まあ、成功したみたいだからいいけど。」
サリスは、伸びをすると術をかけた犬を見る。

「クウン」

犬の姿は、全然変わっておらず、可愛いままだった。

「この種類の、術をかける時、毎回媒体が必要になるのは面倒だけど、しょうがないか……おい、犬あの2人、先に手を出してきた方の手に噛みつきな。もし、素通りされたら後ろから噛みつきな。」

サリスの、今言ったことも軽い魔術だったらしく、犬は屋上にも関わらず、ターゲットのいる所目指して、歩き出している。

「ティアマト、今度は下に下ろしてきて、もうすぐ彼女達が、ここを通るわよ。」

ティアマトは、無言で下に降りると、腕の中にある犬を地面に降ろした。

犬はトボトボと歩いて行った

常盤台女子生徒達

この日、美琴と黒子は、とある事情で帰りが遅くなってしまった。

「もう、すっかり暗くなっちゃったねー。時間は大丈夫なの？
黒子」

美琴は、例の僚監が心配のようだ。さすがに首は、狩られたくない
だろう。

「大丈夫ですわ、今から夕食までは、三十五分もあります。僚も近
いですし、後十五分で着きますわね。」

黒子は、流石の余裕である。

「そう、それなら安心ね あれ？」

そう言った、美琴の視線の先には、可愛い犬がいた。

「わあ〜！ 可愛い犬ねえ！」

美琴は目を輝かせる。

「ええ、可愛いですわね、裏路地の犬でしょうか？」

黒子から見ても、可愛いようだ。

「可愛いなあ〜…」

と、手を伸ばしかけたが、すぐ手を引っ込めた。

「ああ〜・・・触りたいんだけどなあ・・・電磁波が・・・。」

美琴は、可愛い動物を見つけても、いつもこうなってしまう。

「仕方ないですわね・・・私が変わりに、撫でておきますわ。」

黒子の手が、犬の頭へと伸びる

ガブツ

「あいたっ！ 何てことしますの？ この犬は！」

黒子は、噛みそうも無かった犬に向かって怒る。

「ちよっと！ 黒子、大丈夫？」

美琴は黒子の手を見る。

「大丈夫ですわ、歯形がついただけですの。これぐらい何ともないですわ。・・・黒子、今お姉様に手を握られているのですのね！ 黒子、感激ですわーっ！」

興奮した黒子は、口をキスの形にして、美琴に迫ってくる。

「だーから！ そういうのは、止めなさい！」

犬の事を放置して、2人はダッシュで遠ざかっていった

呪術師達

サリスは喜んでいた。呪術が、本当の意味で成功した事に。

「まんまと、引っかかってくれたようだな。あのまま、解除されなければ、一日目に身体能力の変化、二日目に感情の変化、三日目には変身が始まり、四日には理性が、完全に乗っ取られて、私の所に味方として現れるな。」

サリスは、嬉しそうに指折り数えている。

「俺の部下が、増えるのか。」

ティアマトも嬉しそうだ。

「まあ、精神を鍛えている奴にかけても、乗っ取ることが出来ないらしいけど、あの小娘に精神力なんて、ないでしょ？ あはははははっ！」

呪術師は高らかに笑った

街に現れた呪術師（後書き）

頑張りました（汗）

小さな異常 1 (前書き)

出てくるキャラクターで、名字で書かれるのは仕様です。誤字ではないです。

小さな異常 1

呪術師出現二日目 ジャッジメント第一七七支部

「昨日、そんなことがありましたの……。」

黒子は、支部に来るなり突然、昨日に不可解な事件が、あったことを知らされた。

「ええ、そうなのよ。昨日の夕方に、一台、警備ロボットが、壊されていたんです。上から、何か強い力で押し潰された感じで、ぐしゃっ、となっていたの。」

固法先輩こと固法美偉は、眉を寄せながら言う。

「しかも、私の出来る範囲の限界まで、その周辺にあったカメラの映像を調べたんですけど……誰映ってなくて、突然ロボットが、ぐしゃっとなった映像しか、無かったんです。」

初春は、申し訳なさそうに言う。

「仕方無いですわよ、初春、もしかしたら遠距離でも能力が使える、能力者かもしれませんし。」

黒子は、初春の肩を叩いて言う。

「それが……。」

「実はね、それに該当する能力者は、皆アリバイがあるの。バンクの情報だし、間違い無いわ。」

「それって、つまり……」
黒子の目が、ジト目になる。

「お手上げ……」

と初春。

「ってことね……。」

固法が椅子にもたれかかって言う。

「はあ……。」

三人の溜め息が、八モる。……暫くの沈黙……と、そこに
「やつほーっ！ 固法先輩、初春、白井さん！ 面白い都市伝説が、
増えたんですよ。」

沈黙をぶち壊したのは、涙子だった。

「ああ、佐天さん！ こんにちは。」

と、初春は、途端に明るくなる。

「こんな空気になった時は、佐天さんが居てくれると、助かります
よー！」
「こんな空気って……。」

涙子は、苦笑した。固法も黒子も。

「ところで、新しい都市伝説って、何ですか？」

「よくぞ聞いてくれました！ まだ、その都市伝説が出来たのは、一日前なんだけどね……」

黒子（一日前って……伝説と呼ばないのでは？）とツッコミを入れたかったが、涙子の楽しそうな顔を見ると、出来なかった。

「謎の美女と野獣！ 学園都市に現る！」

「え？」

黒子と初春は、ポカーンとして、口を開けていた。

が、固法だけは、真面目な顔であった。

「佐天さん、その都市伝説には写真とか投稿されてる？」

「え？ あ、はい、有りますけど。」

涙子は、固法の意外な食いつきに驚いていた。

「ありがとう、見せて。」

涙子の携帯の画面には、ぼやけた黒い塊が、ちょこんと左端に写っ

ていた。

「これじゃあ、何が何だか分かんないですよね。」

しかし、固法はキリツとした笑顔で

「ありがとう、佐天さん！ あなたは、いつも何かあった時、力になってくれて、助かるわ！」

「え？ あ……ありがとうございます？」

涙子だけは、この状況を飲み込めていなかった。

「信憑性の無いものでもヒントになることが、ありますからね！」

初春！ 頑張りますわよ！」

「はいっ！」

「私にも状況を説明してよお……」

「ごめんなさいね、今説明するわ。」

支部が、涙子のおかげで再び、活気を取り戻した……。

その時だった。

小さな異常 1 (後書き)

長いので、いくつか分けて書きます。

小さな異常2（前書き）

新作のポケモンをプレイしてみました！
更新が遅くなり、申し訳ないです？

小さな異常2

ブルルルルル

支部の電話が鳴った。

「あー……」

四人は意気消沈してしまった。あまりのタイミングの悪さに。

「まあ、こういう時もあります。私に取りますわよ。」

黒子は受話器を取る

「はい、こちらジャッジメント支部です………分かりました。すぐ現場に向かいます。」

すると、黒子は、仕事の時に持つていく、鞆を手に取り

「セブンスミスト付近で傷害、および強盗があったようです。被害者は、バッグが盗まれた時に、重力操作系の能力で、地面に叩きつけられたようですわ。初春！ 犯人のレベルと居場所、ナビをお願いしますわ。」黒子は仕事顔になり、早速と支部からテレポートしていった。

「はい、すぐ調べまーす。」

初春は、いつもの顔で、パソコンの画面に向かった。

「二人とも、仕事が速いわね、温度差が違うけど。」 「そうですね、向かう場所が、違いますから」

固法と美琴は思った。

「強盗傷害の犯人は、男性、透名透名高校の卒業生です。あ、次の角右です。能力は重力付加重力付加で、レベルは2です。能力の射程は、2メー

トルで、相手の身体の一部が、地面に触れていないと、つかえない
ようで、その信号を渡ってください。射程外から拘束すれば大丈
夫です。」
初春は、いくつものカメラの映っている、パソコンの画面に表示し
てあるバンクの情報を、読みながら、犯人の行方を追っている。

セブンスミスト付近 裏路地

黒子は、初春のナビのお陰で、犯人を確実に追っていた。

「へっ！ ここまで来れば……。」

犯人は、後ろを振り返る。そこに、自分を追ってきた、ジャツジメ
ントの姿は無かった、が

「残念ですわね、ゲームオーバーですの。」

犯人は、驚いて顔を戻すと、少し離れた所に、長い距離を、走って
きたにも関わらず、疲れ一つ見せないで、立っている少女の姿があ
った。

「テ……テレポーター……だと!？」

犯人は、この時点で勝ち目は、ほとんど無いと思った。

「観念なさい、もう逃げられないですわ。」

黒子は、余裕の表情で犯人を、睨んでいる。

「あ……ああ！ そうだな、参った降参だ！ 俺は勝てな
い、手錠をかけてくれ！」

犯人は、急に態度を変えやけにニヤニヤしながら、両手を突き出し
た。

「……私に、その手が通用すると、思いますか？」

黒子は、鋭い洞察力と、初春からの、情報により犯人が、何をしよ
うと企んでいるのか、分かった。「生憎、あなたの能力は、把握し

てますの。重力付加・・・でございますわ。」

それを聞いた犯人は、舌打ちした。嫌そうに。

「へっ、それが何だっただ、俺の能力を知っているからって、お前に何ができる？ 俺の至近距離に来た瞬間、お前は地面に、叩きつけられているんだぞ！？」

犯人は、叫ぶように言う。「なら、地面に触れなければ、いいのですわ。」

黒子はフツ、とその姿を一瞬で、消した。

「っ！」

黒子は、犯人の１メートル頭上にいた。

「少々痛いですが、我慢してくださいませ。」

黒子は、お得意の、空中ドロップキックを相手にしようと、構えた。

普通、黒子に蹴られた相手は、頭から地面にぶっ倒れる。

しかし、今回は・・・違った。

「ぐあぁっ!？」

黒子の、少女とは思えないキックを、食らった犯人は、首を、曲げてはいけない方向に曲げ、宙を舞い、6メートルぐらい、地面を転がった。

「え・・・え？」

蹴った本人は、自分のキックの威力に驚いていた。普段の、黒子の脚力では、本気でやっても、大の大人を転倒させる程度だったのに、足に触れただけで大人が、すっ飛ばなんて思っていなかったからだ。

「・・・白井さん・・・まさか殺してないですね・・・」

」。

マイクから、低く初春の音が聞こえた。

「ええっ!?!? そ……それは無いと……。」

黒子は、慌てて地面に転がった、犯人に駆け寄り、脈をはかる。

「……大丈夫ですわ……脈はありますの。」

黒子は安心して、胸をなで下ろした。

「白井さん、いくら実力行使とはいっても」

「私、力加減はしましたの!」

黒子は、叫ぶように言うと、携帯を閉じた

小さな異常2（後書き）

また、更新し始めるのでよろしくお願ひします！

小さな異常3（前書き）

おそらく、この話唯一のほのぼのに、なるかと思います。

小さな異常3

それから少しして、アンチスキルが、犯人を引き取りにやって来た。「うわぁ・・・ボロボロだなぁ・・・よく首の骨、折れなかったな・・・」

アンチスキル達は、担架に犯人を乗せつつ、そんな事を呟いた。

「何故、あそこまで犯人は、すっ飛んだのでしょうか・・・私、軽く脚を触れさせただけ、ですのに・・・」

蹴った瞬間から、おかしかった。まず第一に自分の脚が、あんなに犯人の首に、めり込む訳がない。それにこの前は、蹴りを逆に受け止められて、揚げ足をとられ、投げられてしまった事があるのだ。

「多分、蹴った所が良くなかったのでしょうか！ ええ、きっとそうですわ！」

黒子は、強引に納得すると、初春に電話をかけた「・・・あ、白井さん？」

「おずおずと、初春が電話にでた。」

「先程は、失礼しましたわ、どうやら蹴りどころが、悪かったようです。」

黒子は、強引に電話を切ってしまったことを、謝った。

「私の方こそすいません！ 冗談が過ぎました。白井さんが、そんなミスするわけ無いですよね。」

初春も、どうやら気にしていたようだ。

「当たり前ですよ。私を誰だと思ってるんですの？」

黒子は、夕日が射し始めた道を歩きながら、寮へ帰っていく。

「それにしても白井さん、今日は本当に、パワフルでしたね！ 私羨ましいですよ。」初春の、声のトーンが、2段階上がった。

「犯人を、一発KOさせるしいつもは、犯人を追跡する時、走りと走りの間に、疲れが溜まらないよう空間移動を入れるのに今回は、犯人を追い詰めるまでの、約30分ずっと全力疾走してたから、驚

きましたよお！」

携帯のスピーカーから、ハキハキとした声が、聞こえる。

「ええ！？ 私、そんなに走ってたんですの？ 全然気付きませんでしたわ……。」

黒子自身は、疲れ一つ感じなかった。息切れもしなかった。

「流石ベテランですねえ、私にもその体力、少し分けてくださいよお。」

「筋トレを、頑張るしかないですね。」

しれっと、黒子は言う。

「うう……頑張ります。」言葉を濁しつつ、答える初春であった。

「あ、そうそう！ さっき佐天さんが、夕食に焼肉でもどう？ っ
て言ってたんですけど、許可取れませんか？ 御坂さんと一緒に」
初春は、行くのを前提で、話している。

「ええ、宿泊許可は難しいですが、夕食の夕食の許可なら、難しくは無いですよ。」

「そうなんですか！？ やったー！」

携帯ごしに、初春の嬉しそうな声が、聞こえる。

「お姉様にも伝えておきますわ。何時にどこへ行けばいいんですの？」

「6時半に、私達の寮の前でいいですか？」

その焼肉店とやらは、柵川中の、寮の近くにあるようだ。

「分かりましたわ、許可は取れると思うので、待っててくださいですの。」「分かりました」
「こうして、電話は切られた。」

柵川中学女子寮前 夜

「やはり、外食許可は楽に取れましたわね。」

黒子が、伸びをしながら言う。

「そうね、10時までには帰ってくれば、何も問題無いし。」

寮監に許可を取りに行ったら、「分かった、10時までには帰ってこれれば、罰はあたえん。」

と、言っていたのだ。

「あ、もう来てたんですねっ。」

「もう、言い出しつぺの佐天さんが、遅くてどうするんですか？」

初春と涙子が、寮から出てきた。

「今来た、ばっかりだから、待ってないわよ。」

黒子も頷いた。

「オープン記念に貰った、2時間食べ放題チケットが、見つからなくて、探してたんですよ……ありましたけど。」

涙子は、スカートのポケットから、「4名様限定！ 2時間900円食べ放題」

と書かれた、紙切れを出した。

「しかも、その焼肉店って匂いが、服とか髪につかない、らしいんですよ！ 女性にぴったりですよね。」

初春は、うっとりしながら言う。

「しっかし、学園都市に来てから、焼肉なんて食べて無かったわ……

・あ、なんか、お腹空いてきた、早く行こう！」

「私もですの……この空腹は、尋常ではないですわ。」

「そうですね！ 百聞は一見に如かず、ですしね！」

2人の、空腹宣言により、4人は歩き出した。

焼肉店 「牛炎亭」（ぎゅうえんてい）

「へえ、こんな近くに出来たんだあ。」

「お店のデザインも、シンプルでいいですわね。」

その外見は、女性も気軽に入れる感じだった。

「あ、結構人、入ってますね。早く、入っちゃいましょう。」

「いらつしやいませ、四名様ですね、食べ放題のチケットは、ありますか？」

「はい、あります。」

涙子は、定員にチケットを見せた。

「はい！ 結構です。ごゆっくりどうぞ。」

4人は、テーブル席に案内された。

「へえ……各自で肉が焼けるんだ、便利ね。あ、黒子、メニュー取って。」

テーブルには、4人分の肉を焼く場所が、あった。

「はい、どうぞですわ。」

「佐天さん！ このカルビ美味しそうですう。」「このミノっての、食べてみたいなあ……。」「豚トロねえ、これ美味しいのかしら？」

「ん……私、ここのメニュー、すべて食べたいですわ……」

そんなこんなで、注文は決まり……

「ご注文がお決まりでしたら、お伺いします。」

インターホンを鳴らすと、すぐに定員が来た。

「私、この上カルビセットをお願いします！ ドリンクは、烏龍茶で！」

と、初春。

「ミノと上ハラミセットで、ドリンクはカルピス。」

と、涙子。

「私は、豚トロとタン塩セットで、ドリンクはジンジャーエール。」
と、美琴。

「私は、このページから次のページ、すべて頂きますわ。」

「……ええっ!?!」

黒子以外、全員驚いてしまった。もちろん、定員も。

「えーっと、お客様、2時間以内に完食、出来ますか？」
定員は、引きつった笑顔で、確認を取った。

「ご心配なく、全て食べられますわ。私、それぐらい空腹ですよ。」
黒子は、平然と答える。

「か……かしこまりました。」

定員は、驚き顔を張り付かせたまま、厨房に消えていった。

「ちょっと白井さん、あれ、どう考えても、8人前はありますよ！
？」

初春は、軽く動揺している。

「白井さんって、いつもはそんなに、食べましたっけ？」
首を傾げる涙子。

「本当に全部食べられるのぉ〜？」
呆れ顔の美琴。

だったが……

「あ、ありがとうございました……た〜。」
会計の定員は、ポカーンとしていた。

帰り道

「ま、まさか黒子……本当に食べきるなんて……。」
「しかも、焼肉だけじゃなくて、馬刺とかも食べるなんて……。」

「い、いや〜凄かったな、食べるスピード……。」
3人は、心底驚いていた。いや、絶対驚く。

「単に、空腹過ぎたのですわ。」

と、驚愕している3人と満足そうな1人は、帰った。焼肉店、涙目
だった。

小さな異常3（後書き）

次回から段々、シリアスになるかな？

小さな異常4（前書き）

なんとか更新出来ました？
短いですけど

小さな異常4

常盤台中学校 女子寮 夜

「ふう、さつぱりした〜。」夕食の後、余裕を持って、寮に帰った2人は、ゆっくりと、寝る準備をしていた。

「んーっ！・・・とあーっ！」

「・・・何やってんの黒子・・・。」

風呂から出るなり、黒子の奇声が聞こえてきたので、美琴は思わず、突っ込んでしまった。

「い、いえ、お姉様、私は単に、爪を切っていただけです。そんな、険しい顔で私を見ないでくださいな。」

「じゃあ、何で奇声なんかあげてたの・・・。」
美琴は、より険しい顔なる。

「それが、何故だか、中指の爪だけが、全然きれませんの。爪切りの刃が、爪に食い込んでいかないんですのよ。」

と、言い黒子は、左手の中指の爪を、美琴に見せた。「本当だ！全然傷ついてないわね。・・・爪切りも見せてくれない？もしかしたら、刃が欠けてるのかも。」

美琴は、爪切りが、原因かもしれないと、思った。

「今まで切れてたんですのよ？まさか、そんなはずは・・・あれ!?」

黒子の持っている爪切りの刃は、ボロボロに砕けていた。

「ほら！ やつぱりそうじゃない！」

「・・・そ・・・そうですわね！明日買いにいけませんと。」

黒子は、釈然としないなか、無理矢理、事を終わらせると、毛布を被り

「そつえば、明日ジャッジメントの、新人研修があつて、私が指導する事になっていたんですの！早く寝ませんと・・・。」

黒子は、やはり仕事熱心なのだ。

「あ、そうなんだ！　じゃあ、私も寝るわ。」

美琴も、電気を消してベットに入った。

「おやすみですの、お姉様。」

「おやすみ、黒子。」

この都市のどこかで、誰かが、細く、笑った……

小さな異常4（後書き）

次回から、物語が進みます？

荒れ狂う感情1 (前書き)

出だしだけあって、短いですが？

荒れ狂う感情1

目覚めは、最悪だった。よく、覚えていないが、怖い夢を見ていた、気がする。

それに、何だか、無性にイライラする。

でも、体の調子は、とても良かった。寝起きなのにボーっとしないで、スッキリしている。

だから、体の調子と心の調子が、合わなくて逆に調子が狂うのだ。

「あ、おはよう黒子、もう起きてたんだ。」

黒子が、最悪の目覚めを味わっている、美琴が起きてきた。

「…………おはようございます、お姉様。ちよっと顔を洗ってきますの。」

なんだか、素っ気ない挨拶だった。いつもなら、べったりくっ付いてきて、「お召し替え、やって差し上げますわ〜。」とか、テンション高いのに、今日は何だか、機嫌が悪そうだった。

「…………そっとしてあげよう。多分、今日の研修のことで、色々あるんですよ。」

美琴は、そうつぶやくと洗面所に、消えた黒子を静かに見送るのだった。

荒れ狂う感情1（後書き）

次回から、また長くなります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6913n/>

とある呪術の都市破壊

2011年5月14日04時32分発行